



おしえの花束

雲 晴

新年号

「雲 晴」第二十九号

貞 林 瑞 正 寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五-四六-五
電話(03)3627-3411
FAX(03)5699-1591
一五

平成三十一年一月一日発行



謹んで新春の お慶びを申し上げます

平成最後のお正月を迎えます。天皇陛下が本年四月三十日に退位され、五月一日に皇太子さまが即位されることになりましたので、平成に代わる元号が定められます。三十年前に昭和天皇がご崩御され、これからも国が平安であることを願い新しく制定された「平成」も終わりを告げようとしています。

平成の三十年を振り返りますと様々な出来事がありました。残念ながら自然災害やテロなどの事件も多く、必ずしも平穏無事な時代だったとは言えなかつたかもしません。

平成七年の阪神・淡路大震災、同年には地下鉄サリン事件がありオウム真理教が世間を震撼

させました。その後も東日本大震災、熊本地震、昨年は北海道胆振東部地震などもあり、その間には台風や豪雨災害なども多くありました。また海外では湾岸戦争、イラク戦争、9・11同時多発テロなども平成の時代でした。

このような激動の時代を過ごされた天皇皇后両陛下への印象や記憶と言えば、それは大災害の度に被災地に赴き、被災者の方々にお声をかけ、お見舞いをされていたお姿ではないでしょうか。大変な時代を共に歩まれた両陛下におかれましては、どうか退位後も国民の心の支えとしてお元気でお過ごし頂きたいと念じます。

浄土宗におきましては、平成二十三年に法然上人八百年御遠忌をお迎えしました。法然上人が平安末期にお生まれになり、八十歳で往生されるまでのこの時代は、源氏と平家の争いをはじめ天災飢饉など正に混乱の世でありましたが、益々混迷を深めていく一方の現代社会とどこか似ているような気がします。八百年御遠忌にあたり浄土宗が提唱した理念は「万人平等救濟・共生・非暴力」でした。

新たな元号と時代を迎えるにあたり、いま一度法然上人のみ教えに立ち返り、お念佛の信仰により平和で安心して暮らせる世の中を目指しましょう。

ある新聞のコラムに「loveは異質なものを求め、likeは同質なものを求める作用」と定義されていた。私は漠然とloveはlikeより魅力的なものを感じていた。このコラム

なる。苦しい時に人と違ってしまうことを恐れて本来の自分を隠す傾向が生まれると、それぞれ状況や受け止め方が全く違うのに、全部が同じであるという前提では、生きることが息苦し

● loveとlike ● 回向院副住職 本多将敬

では「自分と同じ心地よさを求める同

なるのではないか?

調圧力から、集団の中では異質なもの排除する極端なlikeが求められる傾向にある」と述べられていた。それが集団の中でのいじめを生む素地に

なる。祀尊在世の頃、インドではカーストによる差別がひどく、その中で祀尊は差別に抗い、それぞれが素の立場で幸せになることを模索し、万民救済の為

考えがあることを受け入れることが必要だ。念仏を通じ、自分だけでなく他人へのいたわり、思いやりの気持ちを高め、人としての深みある成長をしたいものである。



民話の小箱 (岩手県)

ベコを連れた雪女・雪の降る里



昔、あるところに太一という利かん坊だが、心優しい男の子とお祖母さんが暮らしていた。

ある夜、太一は糸紡ぎをするお祖母さんに「雪が降る日には雪女が出るの

よ。あるところに太一といふ利かん坊だが、心優しい男の子とお祖母さんが暮らしていた。

ある日のこと。太一は近所の子供たちは本当か」と聞いた。お祖母さんは「本當だ、雪女は悪ばかりしている子供の所に現れるそうだ。雪女は顔も

着物も白く、牛を引き連れていて冰の

ように冷たい手で乳を搾り飲ませようとする。その乳を飲むと命を落としてしまう」と答えたが、太一は全く信じなかつた

太一は橋を渡つて家へ帰ろうとした時、橋の向こう側だけが激しく吹雪っていた。橋を渡らないと家に帰れないの、太一はそろりそろりと橋を渡つた。

やつと橋を渡り終えた時、目の前の吹雪が止み、そこに白い牛を連れた女

が立つていた。

に阿弥陀の教えを我々に残された。同

質なものを好むこと自体は悪くはないが、「自分らだけが正しい」という驕慢心には気をつけたいものである。政

治やメディアにおいても一昔前に当

たり前であり、良いとされていたものが、

時代が変わると全く違うことになるこ

ともある。他者にもそれぞれの状況や

考えがあることを受け入れることが必

要だ。念仏を通じ、自分だけでなく他

者へのいたわり、思いやりの気持ちを

高め、人としての深みある成長をした

いものである。

感謝の日暮らし

ある人が、法然上人に「お念仏を申す時、必ず念珠を持たずともよろしいでしょうか」と尋ねた時、法然上人は「必ず念珠を持つべきなり。世間の人が、歌を歌い舞を舞う時でも、その拍子に従つて歌つたり舞つたりするなり。お念仏を申す時は念珠をはかせにて舌と手を動かすなり」と答えられました。

「念珠をはかせにて」とは、念珠をくるのに合わせてという意味で、お念珠をくるのに合わせて、南無阿彌陀仏を申すということなのです。淨土宗の教えに「ただ一向に念佛すべし」とあります。お念仏さえ申せば念珠など持つ必要はないかのように思ひ、お尋ねになつたのでしよう。

これに対し、法然上人は「必ず持つべきである」と仰せられました。

「信は莊嚴より生ず」との言葉があ

一口法話



太一は、これはもしやと思い逃げようとしたが身体が動かない。そのうち女が手招きすると、太一の身体もひとりでに女の前に行ってしまった。女は太一に牛の手綱を持たせ、牛に雪を食べさせたかと思うと白い手で乳を搾り始めた。

桶に真っ白な乳が溜まると、女は乳を手ですくいあげ太一の前に差し出した。どうすることも出来ない太一は思わず目を閉じた。すると女は乳を太一の顔めがけてかけたが、太一は咄嗟に顔を逸らし、そのまま気を失つてしまつた。

気がつくと空から大きな雪がどんどん降つていた。

太一は、あの女が雪女だったのかと考えたがよくわからなかつた。何も悪さをしてないし、ひょっとしたら狐の仕業かも知れないと思うのだつた。

おしまい



「亥」

故林 錦洞書

日にお祝いとして先代より贈られた作品であります。

左側には「平成十九年丁亥三月錦洞影」とあり、作品が書かれた年月と雅号が記されています。

士山宝永地震、近年でも三宅島噴火、阪神淡路大震災、新潟県中越沖地震などもすべて亥年に発生しています。

今年は亥年ですが、これは金文（中国の古い書体）でかかれました「亥」です。この字は動物の骨格を表しており、いかにもイノシシが勇ましく突進していく様子が書で表現されています。

右側には「祝暎女八十四華誕寿」と書かれており、亡き母暎子が亥年のため十二年前の誕生

亥年は何故か地震が起きる年

ります。形から心が導かれるのです。書物に向かえば読む心に、筆を持って書きたい心になります。念珠をくることにより、お念佛が口から出るのであり、念珠は必ず持つべきであります。

「手に数珠を取れば引かれておのずから心に浮かぶ南無阿弥陀仏」。お念珠は、いつでもポケットやハンドバックにいれておきましょう。ポケットやハンドバックに手をやつした時お念珠にふれ心がひきしまり、仏の子としての自覚にめざめ、思わずお念佛が出るのです。仏教徒としてのプライドと信念を持つて常に身につけましょう。

総本山知恩院布教師会ホームページより



春

謹賀新年

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。

今年も心を新たに精進いたしますので、檀信徒の皆様におかれましては、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

亥年の守り本尊は、昨年の戌年と同じく阿弥陀如来です。浄土宗の御本尊でもある阿弥陀さまのご加護により、今年一年檀信徒の皆さまが平安に過ごされることを心より祈念申し上げます。

平成三十一年巳亥 元旦

迎



貞林院瑞正寺

住職	林清方
副住職	林良政
法類総代	林英道
同寺総代世話人	一同

で、ご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。

* 春彼岸会法要 三月二一日（木）

施餓鬼会法要 五月十四日（火）

七月お盆法要 七月十四日（日）

八月お盆法要 八月十三日（火）

本年の行事につきましては、下記のとおり予定しております。近づきましたらあらためてご案内いたしますので、お誘い合わせの上ご参詣ください。
* 春・秋彼岸会法要につきましては、寺報にてご案内をしております。お中日に塔婆回向をしておりますの

平成三十一年 年中行事のお知らせ

* 秋彼岸会法要

九月二二三日（月）

仙台浄土寺団参を終えて
昨年十一月四日～五日に宮城県仙台にある浄土宗浄土寺へ総勢十八名の団参を行いました。

平成二十三年三月の東日本大震災による津波により浄土寺の本堂・庫裡のすべてが流されてしまいましたが、その後ご住職はじめ檀信徒の方々による大変なご苦労により平成二十九年、移転先に新たな本堂・庫裡が再建されました。この本堂に旧瑞正寺のご本尊他四体のお像が納められております。

この度の団参は、地元水元から遷座され新しく生まれ変わったご本尊をお参りさせて頂くとともに、震災物故者の方々へのご供養が目的でした。



「震災当時の様子とこれまでの苦労話などをされる中澤秀宣ご住職」

淨土寺参拝後に近くにある震災遺構「仙台市立荒浜小学校」を見学、地元ボランティアの方にご案内頂きました。



この小学校には、児童や地元住民など三二〇名が避難して無事だったことなど被災直後の様子を聞かせて頂きました。被災された方々の心の痛みは七年過ぎてもまだまだ癒されることはないことを知らされます。その後荒浜にある慰靈碑をお参りしてから秋保温泉へと向かいました。宿での夕食は浄土寺ご住職夫妻と総代様も交え、和やかに両寺の交流も行うことができました。中澤ご住職より「震災により大変な思いましたが、そのお蔭で人の温かみも知ることができた」という当山への感謝のお言葉が印象的でした。このような仏縁を受けたことにあらためて感謝したいと思います。合掌